

アメリカ合州国における林業と環境保全運動（3） —ニューヨーク州での保全運動の展開—

伊藤 太一

Forestry and Conservation Movement in the United States (3)
—The Development of Conservation in the State of New York—

Taiichi ITO

要 旨

自然美を評価する機運がいち早く高まったニューヨーク州では、19世紀後半にナイアガラ瀑布とアディロンダック山地の保全が同時に進行した。しかしながら、ナイアガラ瀑布は既に多くの人に知られた名勝となっていたため、その風致の保全が比較的円滑に受け入れられたのに対して、広大な面積にわたり私有地が分散するアディロンダック山地においては利害の調整が困難であった。そのため、その風致ではなく運河の水利を保全するという功利主義的な考え方から保全が始まった。しかしながら、同様に功利的な林業は、伐採だけの製材業と混同され、1895年の州憲法のいわゆる「永久に自然に (forever wild)」条項で、森林に手を加えることが一切否定された。このことからアディロンダックの保全運動は世論を動かす論理としてはコンサベーションを目的としていたが、運動推進者の感情にはプレザベーションの思いがあったと考えられる。

1. は じ め に¹⁾

19世紀半ば頃からアメリカにおいて自然環境の保全に対する関心が芽生えてきた。その動機は2種類に大別される。まず、生活が安定してきた結果、自然環境が開拓を通じて征服する対象から享受する対象に変化したことがあげられる。これは特に都市化による生活環境の悪化と自然の喪失によって助長された。その例としてコール (Thomas Cole) やその弟子のチャーチ (Frederic Edwin Church) らのロマン主義絵画の隆盛があげられる。それまで人間の手が加わった田園の自然が絵画の対象であったのに対して、彼らは荒々しい手つかずの自然に崇高な美を見出し、描き始めた。

もうひとつの関心は環境の悪化にともなう生活基盤の破壊への危機感に関わっている。前者が点としての名勝などの特定の地区をその保全の対象としてとらえたのに対して、後者においては面として広がりをもった地域が対象となっていることが特色としてあげられる。本論ではほぼ同時期にニューヨーク州内で保全が進められたナイアガラ瀑布 (Niagara Falls) を前者の事例として概説するとともに、その発展形態としてのとしてアディロンダック山地 (Adirondack

Mountains) の保全を後者の事例として検討する。

2. ナイアガラ瀑布の保全

ニューヨーク州とカナダのオンタリオ州の境界に位置するナイアガラ瀑布へは1820年代から旅行者が訪れるようになり、その後50年間にその数は10倍に増加し、観光が地域の最大の産業となった²⁾。しかしながら、次第にナイアガラ瀑布の眺望にすぐれた場所が私有化され、1860年頃までにはそれらの地点に柵が張りめぐらされ、入口には料金徴収小屋が並ぶようになった。また、観光馬車や土産物売、ガイドなどが旅行者に付きまとった³⁾。このような景勝の私有化とその商業主義に対する反発からナイアガラ公園の設立運動が展開された。

2. 1 保全運動の展開^{4, 5)}

1832年にコーク (E.T. Coke) が初めて滝の保全を主張したとされるが、その考えを広めたのは画家のチャーチであった。彼は1856年にナイアガラに来て、“Horseshoe Falls” という有名な作品のスケッチを描いている。この際、彼は商業主義によるナイアガラ瀑布周辺の侵食に悩まされ、公園化の考えを抱いた。彼は当時すでに著名な画家として、その有力な人脈を通じての社会的影響力が強かった。一方、その知人でもあるオルムステッド (Frederick Law Olmsted) は幼少の頃からナイアガラを訪れていたことに加えて、当時ナイアガラに近いバッファローで公園計画に携わっていた。このようにナイアガラ瀑布を頻繁に訪れる機会があった彼は40数年間の変貌を痛感したにちがいない。その惨状に胸を痛めた彼は1869年8月7日にドーシャイマー (William Dorsheimer) やリチャードソン (Henry H. Richardson) などの有力な知人に保全を持ちかけている。その翌日にはセントラルパーク設計の際のパートナーでもあるヴォクス (Calvert Vaux) も加わった。

カナダのダファリン (Lord Dufferin) 総督からの協力依頼もあり、1879年1月7日にロビンソン (Robinson) ニューヨーク州知事はオンタリオ州の代表も加えてナイアガラの保全計画の策定を州の委員会 (Commissioners of the State of New York) に要請した。この委員会からレポートの作成を依頼されたオルムステッドと州地質調査局のガーディナー (James T. Gardiner) は5月28日にナイアガラ瀑布を訪れている。オルムステッドはその報告書に対する委員の賛同を9月27日には得たと記している。ガーディナーは、1864年のヨセミテの州立公園化、1872年のイエローストーン国立公園設立を引き合いに出して州政府による保全をうながした。また、オルムステッドは土地を買取り、現存の建物を撤去し、公園や人工的な囲いは作らないことという保全方針を提案している。

1880年3月末にそのレポートが公表され、著名人らが賛同した。これらの人物によって提起された保全運動は多くの人の支持を得るにいたり、1880年にはニューヨーク州議会に州保留地 (state reservation) としての土地取用に関する法案が提出された。しかしながら、その後コーネル (Alonzo B. Cornell) 知事の無関心のために停滞した。コーネル知事は国際的な公園に対して州が支出することに同意しなかった。そこで保全推進側は新聞などを利用してキャンペーンを展開した。1881年夏にナイアガラ瀑布で開催された銀行家の会議でもオルムステッドらの保全計画は支持されている。

オルムステッドの要請によって1883年1月11日にはナイアガラ瀑布協会 (Niagara Falls Association) が結成された。1882年には知事がクリーブランド (Glover Cleveland) となり、

1883年にふたたび保留地を設置する法案が提出された。両院を通過した法案が1883年4月30日にクリーブランド知事によって署名され、5人の委員が任命され、6月にはオルムステッドとガーデイナーの案が推薦された。

一方、協会の強力な活動の結果、土地の買収資金を得るための公債発行法案は1885年4月30日にヒル (David B. Hill) 知事によって署名された。対立関係にあるグリーン (Andrew H. Green) が委員になったためオルムステッドの計画案策定への参画が危ぶまれたが、委員会は1886年10月6日オルムステッドとヴォクスにナイアガラの保全計画を要請した。1887年にはナイアガラの景観を復元する彼等の案が提示された。オルムステッドの案は自然状態の復元を第一として、人工的なものを抑制している^{6, 7)}。

これを受けて5人からなる委員がその土地の選定を行ない、166.7haが選ばれ、そのうち買収する土地の収入手続を含む評価額は\$1,452,810.40となった。同年7月15日にはこの地区が州保留地 (New York State Reservation) として公開された。なお1806年から州が払い下げたナイアガラ瀑布周辺の土地収用までにはその後20年を要した。

一方カナダでも、瀑布の周辺の商業化を憂慮して1873年に政府が委員会 (Royal Commission) を設立したが、何も進展しなかった。画家チャーチはナイアガラ川がカナダとの国境となっていることから、国際協力の必要性を感じて、カナダのダファリン総督にコンタクトをとった。それを受けて、ダファリン総督は1978年にナイアガラの国際公園 (international park) 化をオンタリオ州とニューヨーク州知事に呼びかけた。しかしながら、同年に彼の任期が終了したため彼は帰国した。

上述したようにニューヨーク州知事ロビンソンはその考えを支持し、州委員会がオルムステッドとガーデイナーに調査を依頼した。その土地の買収を含む調査レポートはカナダ側にも支持されたが、カナダ連邦政府かオンタリオ州のいずれが公園化を進めるかに関してその地域管理権を巡って対立した。それぞれが相手がその公園化の費用を負担すべきであると主張したため、進展が見られなかった。ニューヨークほど財政にゆとりのないオンタリオでは連邦政府による設立を望んだ。一方連邦政府は特定の地域に予算を注ぐことが困難であった。このカナダの国内事情に帰因する調整の困難さのため、1882年までにアメリカ側はカナダとの国際公園化の考えを放棄した。

ダファリン総督の後任としてカナダに赴任したローン総督 (the Marquis of Lorne) は1883年6月にナイアガラ瀑布の国立公園化を支持した。しかしながら、ニューヨーク州での公園化運動の進展に刺激されてか、1885年3月30日にナイアガラ瀑布公園法案 (Niagara Falls Park Act) がオンタリオ州議会で成立し、1886年末には154haの土地と建物の評価額が\$436,813.24と報告された。翌年には公債の発行によってその費用を賄うことになった。それを受けて1887年に州政府は新法案 (Queen Victoria Niagara Falls Act) を成立させた^{8, 9, 10)}。

今日ではオンタリオ州側のナイアガラ公園はエリー湖とオンタリオ湖を結ぶナイアガラ川の左岸に添って56kmに渡り、その面積は1,254haに及ぶ。その内容は滝だけではなく遺跡、ゴルフ場、キャンプ場、マリナー、水泳ビーチ、レストランや園芸学校まで含む総合公園となっている。この点でオルムステッドの主張した自然状態が維持されたアメリカ側とカナダ側は著しく対照を成していると言える¹¹⁾。

2. 2 保全運動の特色

ナイアガラ瀑布がアメリカで最初の州立公園となったことは、それが滝と言う名勝の保全で

あったが、私有化された土地を買い取るという前例となった点でその後の環境保全運動の原点ともなっている。

もうひとつナイアガラ保全運動で注目すべき点は、700人および著名人の署名を集めたり、マスメディアを有効に利用したことからも理解されるように、国民的支持を得るためにきわめてモダンな運動が展開された点である。この戦略はその後の保全運動の展開に大きな影響を及ぼした。

また、オルムステッドを中心として組織された有力者が、新聞などを通じて世論に訴え州政府を動かすと言う方式で、ナイアガラ瀑布の保全が成功したのは、その戦略の巧妙さもさることながらナイアガラという名勝としての特性と時代が影響を及ぼしている。

この運動が支持された背景にはアメリカの代表的な観光地としての知名度がまずあげられよう。1846年のオレゴン協定および1848年のメキシコ割譲によって西部の広大な地域を購入するまで、アメリカで一番の景勝がナイアガラ瀑布であった。その後もグランドキャニオンやイエローストーンに次ぐ景観として観光客が途絶えなかった。そのためアメリカを代表する観光地としてヨーロッパからの観光客も迎えていた。彼らによるその商業主義に対する批判は良識あるアメリカ人にとって耳の痛いものであったにちがいない。さらに、人口密度の高い東部の諸都市からの近接性ため、多くの人々がその実体を知っていた。たとえば、前述したようにオルムステッドも6才の時から何度も訪れてその変貌もつぶさに理解していた。

このようにナイアガラという人口に膾炙した場所であったが故に、保全に対する賛同も容易に得られた。また、展望台を占有する人々はそこを訪れる観光客に比してきわめて少数で、かつ政治力も持ち合せていなかった。これに対して、水力を利用した製材工場や、後に問題となる水力発電はその恩恵を享受する人々も多数で、政治力も大きいため、この景観と経済の対立は複雑になる。

3. アディロンダック地域の保全（表－1）

1892年にニューヨーク州北部に州議会で制定されたアディロンダック公園は（図－1）、面積が5,927,600acreにおよび、アラスカの国立公園よりも広大である。そのうち約40%が州の保樹林（State Forest Preserve）となっている（図－2の黒い部分）。換言すれば、6割の私有地が混在するという、いわば地域制の公園となっている。このアメリカの自然公園の中で特異ともいえる私的土地所有がその保全運動の展開に大きな影を投じている。

3. 1 アディロンダック山地の開発¹²⁾

ニューヨーク州の北部に位置し、湖沼の点在するアディロンダック山地（図－3）は、アメリカ独立の結果、1779年にニューヨーク州のものとなったが、利用できる資源もなく農耕にも不適であったがため、19世紀半ばまで西進する開拓前線からとり残されていた。その地域の正確な地図が1830年までなかったことはニューヨーク市から300マイルと言う距離を考慮すると意外に感じられるほどである。

1825年にはナイアガラ瀑布にも近くエリー湖に面したバッファローと州都オルバーニー付近を流れるハドソン川を結ぶエリー運河が開削された。この運河は西部への安価な交通手段を提供した半面、開拓者がアディロンダック地域を素通りする原因ともなった。その後、鉄道が発達するにつれ東部の都市の裕福な階層の避暑地として発展した。まず、1830年代にはアディロンダックの南端に位置するサラトガスプリングスとその鉱泉の人気のゆえにリゾートして繁栄し、山中の湖

表-1 アディロンダック保全関連事項年表

年	事項
1779	アディロンダック地域がニューヨーク州有地化
1784	州有地の払い下げが立法化
1837	地学者エモンズが最高峰に登山
1866	州が初めて民有地を買い上げ
1872	州立公園委員会が任命される
1873	州立公園委員会が公園化を支持する報告を提出
1883	森林購入予算 \$ 10,000 が初めて配当される
1883	州有地の売却が禁止される
1884	サージェント委員会が州有地の保全を提案
1885	アディロンダック保護林設立 (681,000acre)
1885	3人で構成される森林委員会設立
1886	州が地元へ保護林の固定資産税を払う事が立法化
1887	森林委員会による保護林の飛地と木材の売却が立法化
1890	私有地の購入予算 (\$ 25,000) が立法化
1892	アディロンダック公園 (2,800,000acre) 設定
1893	森林委員会が3人制から5人制へ
1894	州憲法会議が保護林を「永久に自然に」保つ条項を採択
1895	新憲法が発布
1896	保護林での別荘地等のリース許可法案否決



図-1 アディロンダック公園位置図



図-2 アディロンダック公園の土地所有図

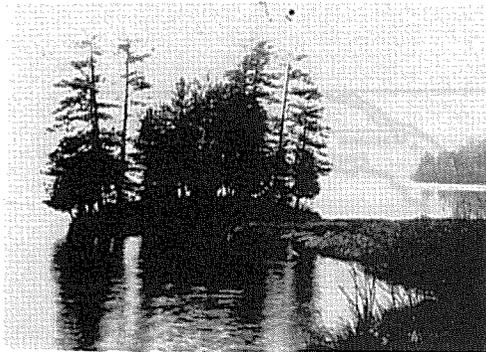


図-3 ラケット湖 (Raquette Lake)

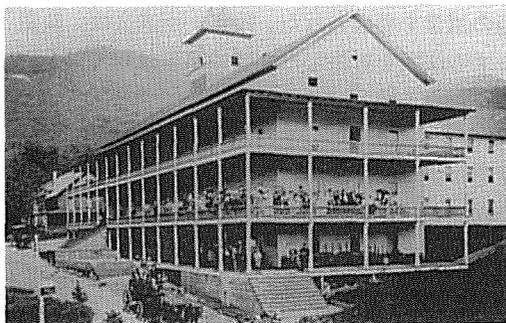


図-4 マレーの著書の自然の健康回復効果の挿絵

を訪れるハンターや釣人も増加した。

1868年にマレー (William H. Murray) が「アディロンダックの探検 (Adventures in the Wilderness)」というガイドブックを書いたところ爆発的に売れ、その健康回復効果 (図-4) を信じてこの本を携えて訪れる人々が増大した。この本によって知れ渡ったアディロンダックは1890年にブームを迎え、都市から避暑客と彼等を収容する宿泊施設が増加した (図-5)。いわゆる俗化したアディロンダック山地の状況に対してその火付け役であるマレーが不満を表明するほどであった。

また、結核の治療に都市から到来する人々もいた。その1人であった医者のトゥルドー (Edward Trudeau) は、余命幾許もないと危ぶまれていたが、アディロンダックで数年生活するうちにすっ



図ー5 リゾートホテル (Blue Mountain Lake House, 1889)



図ー6 ハドソン川の集材風景

かり回復し、1884年にサラナック湖 (Saranac Lake) 畔に結核療養施設を設立した。ここでは収入のない者も収容し、患者が土産物を作って経営の足しにした。

リゾートとしてアディロンダック地域が人気を集めると同時に、メイン州の森林を伐り尽くした木材産業が次第にアディロンダック山中に浸透して行った。製材業者は入植者のいない土地や放棄された土地を安価に購入し、その材を伐採し尽くすと別の場所へ移動していった。そのころ製鉄用の炭の需要が増大し、大きさや形にとらわれずに皆伐されるようになったので、森林の荒廃が加速された。また、初期には流送が容易な針葉樹の、それも一定の大きさの材に限られていた伐採対象が、鉄道の発達にともないパルプの原料としての大小や樹種に関係のない利用が可能になるにつれて、壊滅的な伐採が進んだ (図ー6)。1850年にはニューヨークは全米で最大の木材生産州となり、1900年には全米の製材所の1/3がニューヨークにあった。

リゾート化による都会からの人口の流入と伐採の拡大は当然ながら対立を引き起こした。破壊的な伐採に対する非難が高まった。1864年にはニューヨークタイムスにアディロンダックを保留地とする提案が掲載された。1868年にはコルビン (Verplanck Colvin) が公園あるいは保護森林の設立を提案した。森林管理官のもとで違反者へ罰金や最小伐採木の規定や利用税の徴収を行うべきだと述べている。また、彼はアディロンダックの水源涵養機能をスポンジに例えてその保全の必要性を平易に説明して、人々に訴えた。

3. 2 保全運動の展開^{13, 14, 15, 48)}

1871年にはニューヨークタイムスが保全を支持する運動を展開した。また、同年ウィスコンシン州で起きた大森林火災はアディロンダックの保全の必要性を一層痛感させた。これらの状況から1872年にニューヨーク州議会は公園委員会 (Commission of Parks) 設立法案を可決した。この委員会は鉄道による火災の発生や製材産業の問題に関して、州保護林の設定の可能性を審議する7人の委員から構成され、そのメンバーにはその地域を隈無く歩き精通したコルビンや合州国の林業部門の初代の主任であったハフ (Franklin Benjamin Hough) が含まれていた。

その報告ではエリー運河の水運維持、製材や工場の動力、農家の灌漑、洪水防止のための水源涵養の必要性が述べられた。そのために専門家による森林管理が要望されたが、レクリエーションは支持されなかった。また、その委員の1人に選ばれたコルビンは耕作不適地が公園になるので新たな土地は必要ないという考えを表明した。これはイエローストーン国立公園法案審議の過程で支持派が示した意見と類似している。

1883年1月にはコルビンがアディロンダック山地の測量を委嘱された。同年、州議会は、鉄道会社への払い下げを危惧して、州有地の売却を禁止する法案を可決した。翌1884年はサージェント (Charles Sprague Sargent) を委員長として構成されたもう一つの調査委員会に \$ 5,000 の予算が配当された。彼はこの予算の半分を地図の作成に費やした。翌年の1月にまとめられたレポートにはアディロンダックの森林の価値とその危機状態が簡潔に述べられていた。また、完璧な管理には私有地の買収が不可欠だと指摘する一方、全私有地の買収は現実的ではないとして、3人からなる無給の林業委員会の設置、伐採後のデブリの焼却など私有地を含めての森林保護の徹底、伐採後林地を放棄するという浪費の排除の3点が答申された。新聞の支持にもかかわらず、1885年4月にはこの答申は暗礁に乗り上げ、サージェントは落胆した¹⁶⁾。

しかしながら通商会議 (the Board of Trades and Transportation) のガードナー (Frank S. Gardner) が中心となって起草した法案が州議会を通過した。この組織はニューヨーク市のビジネスマンを中心にして構成された組織であるため、鉄道による運輸の独占を阻止するために水運の確保は重要であった。その中には後の州憲法の条文にも生かされた “forever kept as wild forest lands” という表現が用いられていた。これによってナイアガラ瀑布保留地が設立されたのと同じ1885年の5月15日にアディロンダック保護林 (Adirondack Forest Preserve) が設立された。その条文には3名で構成される森林委員会の設置、管理員の配置、保護林での火災に対する罰則、鉄道の通過地域からの可燃物の除去、土地の買収、保護林の売却、リースの禁止が規定されていた。

保護林が設立されたとは言ってもそれはモザイクのように私有地と入り交じっていた。また、その州有地の多くは一旦民間の伐採業者に払い下げられた際に、商品価値のある材がすべて切払われてから税金の滞納のため州に戻った土地なので、保全よりも育成が必要な空間であり森林とは呼べる代物ではなかった。今日ではこのような場合には放置するプリザベーション (preservation) よりも育成を行なうリハビリテーション (rehabilitation) 的な対応が望ましいとされるであろう。翌1886年にはこの保護林の地元の郡に対して、州が固定資産税を負担するという法律が可決して、地元の支持が得られた。

1890年には州議会は森林委員会に将来の公園を目指した土地の買収費 \$ 25,000 を配当した。1892年5月2日にはアディロンダック公園設立法案が可決した。その2,807,760acre の領域のうち551,093acre が州有地に過ぎなかった。また、公園と称してもその目的はレクリエーションではなく水利保全のための買収対象域の限定であった。その後、有給の5名の委員からなる委員会を設置するランシング (Lansing) 法案が可決された。この中には伐採の規制が盛り込まれていなかった。すなわち、製材産業の政治力に屈したといえる。これを受けて翌年には森林委員会が設立され、その中で木材の販売が可能になった。

しかしながらこの伐採を許可する法に対する反対運動が広がり、1894年の州憲法改定会議の中で州保護林における伐採を禁止する条項が加えられた。この法案起草の中心人物のマックルー (David McClure) は州民のレクリエーションを第一に言及しているが、ここでも水利の保全が最大の理由として主張された。グラハム (Frank Graham) はこの条項の “forever” ということばについて、実際は多数の人が次の改定会議で変更できるものと考えていたと説明している。すなわち、 “forever” と記しながらも乱伐を抑制するための一時的な処置と林業家たちも認識し、あえて反対しなかった。この新憲法は1895年から施行され、さっそく売却や交換、賃貸を求める修正案が議会で審議されたが否決され、今日に至るまでこの “forever wild” 条項は残っている。

このように次第に保全関係法規が整備されたが、製材業者の権益が反映された森林委員会によ

る保護林の管理に対する批判が強かった。その実情については以下，“Garden and Forest”誌の編集者による論説を追ってみる。

1888年4月^{17, 18, 19)}：5 acre未滿，5年未滿の保護林地のリース法案に反対を表明，鉄道会社への湖畔の土地のリースに反対，保護林は金持の別荘のためではなく，河川の保全と住民の衛生のためであると主張。1889年3月^{20, 21)}：運河への水の供給に準ずる機能として人々の健康と生活があげられる，永続的管理のため私有地の購入を求める，アディロンダックの保全と林業の知識の普及を求める。1889年4月²²⁾：保護林地への鉄道の敷設に反対。1889年7月²³⁾：鉄道の侵入による火災や伐採の拡大の問題を訴える。1889年10月²⁴⁾：木材泥棒や樹皮剥ぎ，シカの減少，違法ダムなどを非難。1890年1月²⁵⁾：私有地の買上げ法案の解説とその必要性を述べる。1890年3月²⁶⁾：公園法案について，レクリエーションはあくまでも2次的なもの，鉄道の延長と金持の別荘としての利用が最大の問題だとする。1890年4月²⁷⁾：鉄道の問題と州立公園案での土地の購入を支持。1890年6月²⁸⁾：公園設立にともなう土地購入の支持とレクリエーションの場としての肯定的評価が始まる。1890年10月^{29, 30)}：炭焼きによる森林破壊，クラブの所有林をファーノウが調査し，科学的に管理，保続的に木材が生産される。1890年12月³¹⁾：アディロンダックの36年間の変化を説明。1891年1月³²⁾：伐採による変貌。1891年2月³³⁾：公園設立と土地価格の上昇。1891年6月³⁴⁾：鉄道の阻止，森林委員会批判。1893年4月³⁵⁾：公園設立，林産物販売は監督次第で受容できるとする。1894年3月³⁶⁾：伐採の最小直径に関する12インチ規定が小径だと批判，訓練された林務官による監督を求める。1896年3月³⁷⁾：盗伐問題，森林委員会批判，保護管理の問題，買上げの推進。1987年1月³⁸⁾：土地は高くなるばかりだから買上げ以外に保全の道はない。

全てに記事に共通する考え方は，鉄道の侵入に対する反対，水利が風致より優先する考え，科学的林業の必要性，土地の買上げの必要性などである。しかしながら，水利をアディロンダック保全の最優先の理由に一貫して挙げてはいるものの，レクリエーションの認識が次第に高まってきたのが感じられる。

3. 3 科学的林業の展開^{39, 40, 41, 42, 43, 49)}

アディロンダックの保全推進者の多くは掠奪的な伐採業者の活動には反対したものの，科学的林業を否定しているわけではなかった。それは雑誌“Garden and Forest”や新聞の記事の中にもはっきり読み取れる。しかしながら，今日でも当てはまるが，一般の人々にとっては科学的林業を行って伐採された空間も木材業者が放縦に掠奪し放置した跡地も区別がつくものではなかった。とりわけ，当時，ドイツで林学を学んだ者によって林業が始まったばかりの状況の中では，一般人にとって林業の必要性を認識するのは困難であった。しかしながら，挫折したとはいえ，以下に論じるコーネル大学の演習林の設立は環境保全のために林業の必要性が強く認識されていたことの表われとも考えられる。

連邦政府の森林部門責任者の職をピンショー（Gifford Pichot）に譲ったファーノウ（Bernhard Fernow）は，1898年にアメリカ初の4年制の林業教育機関としてコーネル大学に設立された州立の森林学部（School of Forestry）の部長職を引き受けるとともに，アディロンダック公園内の私有地を州が買上げて設定された30,000acreの演習林の経営を進めた。この森林は30年後に保護林の一部として州に返還されることになっていた。

ファーノウは科学的林業実践の場として好機だととらえ，教育および経営に邁進したが，軌道に乗らなかった。トンプソン（Roger C. Thompson）は以下のような理由をあげている。1. 場所の選定が悪かった。過去に有用な針葉樹は伐採され，残された材は不良であった。さらに，北

側が裕福な人々の別荘地のある湖畔に面していた。2. すでに有用樹が伐採された林地を、生産効率の良い森林に転換するためには資金が不足していた。3. 搬出の際に利用することが期待されていた鉄道が敷設されなかったため、敷地内に加工工場を設置しなければならなかった。4. ファーノウの政治力の不足が実験遂行の敵を作った。

ファーノウは精糖会社（Brooklyn Cooperage Company）と砂糖樽用のブナ材を15年に渡って提供する契約を結んだ。彼はこれをブナ林を利用価値の高いトウヒやホワイトパインに林種転換するチャンスととらえた。しかしながら、そのブナの多くが低質であることが判明し、契約した量の材を得るために伐採面積が増大した。ファーノウから支援を求められ現地を視察したシュェンク（Carl Schenk）は、林種転換をするためには\$30,000の資金は不十分なうえ、アディロンダック自生種ではなくヨーロッパトウヒを選択したのが植林の失敗した原因だと回想している。

さらに、誘致した工場からの排煙やそれによる森林火災の発生と、それに対するファーノウの対応の拙さが隣接する別荘所有者との関係を悪化させた。その結果、所有者の1人である有力な法律家が知事に働きかけ、1903年には林学部への予算の配当を拒否させるまでに至った。これによって70人の学生を擁した林学部は5年にして廃止された。

一方、15年契約で演習林の敷地に工場を設立した“Brooklyn Cooperage Company”は\$350,000も投資していたため伐採を継続し、州政府との訴訟に発展した。結局、会社側が敗訴したが、その際、州が私有地を演習林用地として買い上げた段階で森林に一切手を加えることが禁止される保護林になると言う解釈も可能なため、州憲法の規定と演習林を設立する州法の矛盾が指摘された。さらに、この私企業の誘致を巡ってファーノウの責任も問題となった。

以上のように当初から悪条件に置かれたのが原因とはいえ、このコーネルの演習林経営の失敗は、アメリカでようやく端緒に付いた林業には大きな痛手となり、林業への期待に水を差した。その後、ファーノウは合州国を去り、カナダでの林業教育の発展に尽くした。

一方、1892年にビルトモア（Biltmore）の所有者のバンダービルト（George Vanderbilt）の義理の兄弟であるウェブ（William Seward Webb）はビルトモアを訪れ、アメリカで最初の大規模な林業の実践に感銘した。彼は、その林業を推進していたピンショール（Gifford Pinchot）に、アディロンダックにあるナハサネパーク（Nahasane Park）と呼ばれる自分の所有する40,000acreの森林の調査を依頼した。同年10月に調査したピンショールは、ナハサネが所有者の別荘地を含む森林であることを考慮してか、軽度の択伐施業を提案している。

具体的には、ここでの林業の原則は保続生産とトウヒへの誘導であった。彼は、ナハサネの管理マニュアルを作成するとともに、1896年からここでトウヒの調査を開始した。その成果が1898年に“Adirondack Spruce”という本としてまとめられた。生長量、材積、収穫などが表示されたこの本が、アメリカでの最初の森林施業に関する出版物となった。

さらにこの頃にまでには、ナハサネパークに隣接する68,000acreの森林における林業経営の指導契約も交渉中となっていた。このようにアディロンダック公園内の州保護林の中では林業は締め出されたが、私有地の中ではその実践が広まって行った。

4. 考 察^{44, 45, 46, 47)}

ナイアガラもアディロンダックも私的土地所有がその保全の根本に関わっていたため、規模の点では大きく異なるが、どちらも土地の取用を目指した点が共通する。だが、空間に関してはナイアガラが点としての景勝の保全であるのに対してアディロンダックは面としての保全を行なっ

た。また、その目的も前者が瀑布の自然景観の復元と自由なアクセスを目指したのに対して、後者では水源涵養が保全理由であった。しかし、最大の違いはナイアガラではその保全理由が明快であったのに対して、アディロンダックでは建前として水源涵養が主張されたものの、実質的には複雑な利害がからんでいた。換言すれば、ナイアガラでは風致というもので戦えたのに対して、アディロンダックではそれが保全運動の武器として役に立たなかったと言えよう。このことが今日のアディロンダックの保全にも影を投げかけている。

アディロンダックで公園に州保護林と私有地が含まれる状態は今日の日本における国立公園にきわめて似ている。公園的利用よりも将来の取用の範囲を定めることがその設定目的だったとはいえ、日本やイギリスの地域性に類似するものがそれらの設立以前にアメリカで設定されていた事実は重要である。また、私有地の占める割合が非常に高かったことは今日的な意味を有する。しかし、アディロンダック公園においては禁伐の規定を初めとする諸規制は私有地の部分には適用されなかった点で今日の日本の地域制公園と異なる。

このため、別荘所有者たちがその周囲を取巻く州有地の環境を保つことによって、その既得のアメニティを確保することが、水利保全の裏側に潜む保全運動の理由であるとも考えられる。実際、アディロンダックをレクリエーションの場として一番活用していたのはそこに別荘を持つ裕福な人々であった。また、ナイアガラにおいては景観とレクリエーションという風致を前面に出して人々の支持を得ることができたのに対して、アディロンダックではそれを主たる保全理由として掲げることができなかったのは、この風致が特権的なものであるとの認識の故であると考えられる。このことは1892年のアディロンダック公園設定に際して、その目的はレクリエーションではなくあくまで水利であるという釈明されていることから推察できる。公園は功利主義の時代には社会に受け入れないという危惧の念からそのような解釈を付加されたのであろう。

この点について、ランテ (Alfred Runte) はアディロンダックの保全については、自然環境ではなく水利の維持が最大の動機であった点を指摘し、アメリカの自然環境保全史の中での位置付けはそれほど重くないと考えている。これに対して、ライガー (John F. Reiger) は保全運動の中心はビジネスマンではなく、スポーツマンだとして、水利を主たる保全理由として考えたのは、人々の支持を得るのに好都合だったからと論じている。確かに利用者が当初は裕福な階層の人々だったとはいえ、訪問者がかなり多かったことはレクリエーションの場所として認識が潜在的にあったと考えられる。

さらに、ランテはアディロンダックの保全は地方的なものであると述べているが、それがニューヨークという政治経済の中心地域であることを鑑みると、その影響はアメリカ全体に及ぶと考えるのが妥当である。その点、ウィリアムズ (Michael Williams) はこの保全運動で、後の東部の国立公園設立の種子が撒かれたと述べている。さらに、州保護林のための私有地購入は、1911年のウィークス法 (Weeks Act) による国有林のための私有地の購入の先鞭を付けたものと認識し、ニューヨーク州の財政が豊かであることが可能にした保全であるとはいえ、このウィークス法が実効性を持てなかったことを考えれば、アディロンダックでの土地の買上げは先見の明のある処置と判断した。

さらにナッシュ (Roderick Nash) は1885年のアディロンダック公園設定段階ではレクリエーションや風致をその主たる理由として表面に出せなかったが、1895年の州憲法での規定制定の段階までには風致という対象の置かれた立場が変化してきていることを示唆している。このことは前述した“Garden and Forest”誌の論調の変化からも読み取れる。

保全運動に関わった人々たちは科学的林業を否定していなかった。むしろそれを過大評価し短

期間での成果を期待し過ぎていたくらいだ。サージェントらの林学の専門家も現況の乱伐を厳しく糾弾する一方、科学的林業によって改善を計る必要を痛感していた。世論を反映する新聞も乱伐を問題として、保全の必要を訴えたが、その保全地域における林業を否定してはいなかった。しかしながら、大多数の人々に取って伐採 (lumbering) と林業 (forestry) は同一対象として捉えられた。また、科学的林業の伐採段階も乱伐の跡地も多数の人々に取っては同じように醜く映った。

この林業の認識不足に加えて、保全の本来の目的が水利ではなかったことが、林業の否定の説明ともなる。水源涵養が真の目的であれば、乱伐のあと放置されて保護林になった荒廃林地の回復を促進するために育林が進められたはずである。その際、憲法の規定はむしろ障害となる。逆にプリザベーションを目指すのであれば、ナイアガラの場合と同様、既存の別荘地などの建物も含めて買収しなければならないはずだ。すなわち、別荘を潰し、元の林地として復元されなければならない。そのことが論じられなかった背景にある水利と別荘所有者の既得権の保持と言う利害の妥協が、アディロンダックの保全運動の特色と考えられる。

5. お わ り に

森林に対して手を加えることを一切否定した州憲法の規定は1950年にアディロンダックを襲った嵐によって生じた大量の風倒木の迅速な処理を困難にした。翌1951年に4年半に限ってその処理作業を許可する州法が成立したが、利用可能な風倒木の腐朽が進むだけでなく、火災の危険が増大することが指摘された。この過程を通じて、全く手を加えないことの是非、憲法の解釈とその管理政策の関係、州や国家の経済的な要求と憲法との関係が論議された。

さらに、州憲法の条項追加が議論されていた1894年に、この世に送り出された自動車が普及した今日、道路建設とレクリエーションとの関係で森林に一切手を加えないことの矛盾も明らかになった。しかし、19世紀末に水利と別荘地の環境保全と言う功利主義と風致が混在した動機で憲法に追加された条文は、生態系の保全という近年支持される強力な保全理由を新たな動機として今後も生き延びると考えられる。

参 考 文 献

- 1) HUTH, Hans: Nature and the American, Univ. of Nebraska Press, Lincoln, 1957
- 2) Moriyama & Teshima Limited: Ontario's Niagara Parks, Planning the Second Century, 30-31, Toronto, 1988
- 3) RUNTE, Alfred: National Parks, the American Experience, 2nd Ed., 6, Univ. of Nebraska Press, Lincoln, 1987
- 4) ROPER, Laura Wood: FLO, A Bibliography of Frederick Law Olmsted, 378-382, 395-398, The Johns Hopkins Univ. Press, Baltimore, 1973
- 5) MCKINSEY, Elizabeth: Niagara Falls, Icon of the American Sublime, 263-265, Cambridge Univ. Press, 1985
- 6) FEIN, Albert: Frederick Law Olmsted and American Environmental Tradition, 42-47, George Braziller, New York, 1972 (黒川直樹訳: アメリカの都市と自然, 48-53, 井上書院, 1983)
- 7) MCKINSEY, *ibid.*, 264
- 8) SEIBEL, George A.: Ontario's Niagara Parks, 22-27, The Niagara Parks Commission, Niagara Falls, Ontario, 1987
- 9) Moriyama & Teshima Limited, *ibid.*, 12
- 10) KELLER, Jane Eblen: Adirondack Wilderness, 174-175, Syracuse Univ. Press, 1980

- 11) FEIN, *ibid*, 44
- 12) GRAHAM, Frank, Jr.: The Adirondack Park, a Political History, Syracuse Univ. Press, 1978
- 13) KILLER, Jane Eblin: Adirondack Wilderness, 175-188, Syracuse Univ. Press, New York, 1980
- 14) TERRIE, Philip G.: Forever Wild, Environmental Aesthetics and the Adirondack Forest Preserve, Temple Univ. Press, Philadelphia, 1985
- 15) VAN VALKENBURGH, Norman J.: New York State Forest Preserve Centennial Fact Book, 1985
- 16) SUTTON, S.B.: Charles Sprague Sargent and the Arnold Arboretum, 97-104, Harvard Univ. Press, Cambridge, MA, 1970
- 17) Adirondack Forests in Danger, Garden and Forest, 1, 49 (Mar. 28, 1888)
- 18) A Dangerous Measure, Garden and Forest, 1, 73, (Apr. 11, 1888)
- 19) Adirondack Forests in Danger, Garden and Forest, 1, 87, (Apr. 18, 1888)
- 20) The Adirondack Forests, Garden and Forest, 2, 109, (Mar. 6, 1889)
- 21) Organizing for Forest Preservation, Garden and Forest, 2, 146, (Mar. 27, 1889)
- 22) Railroads and the Adirondack Reservation, Garden and Forest, 2, 181-182, (Apr. 17, 1889)
- 23) Railroads and the Adirondack Reservation, Garden and Forest, 2, 325, (July 10, 1889)
- 24) The Adirondack Reservation, Garden and Forest, 2, 493-494, (Oct. 16, 1889)
- 25) Legislation for the Adirondacks, Garden and Forest, 3, 49, (Jan. 29, 1890)
- 26) Legislation for the Adirondacks, Garden and Forest, 3, 121, (Mar. 12, 1890)
- 27) Legislation for the Adirondacks, Garden and Forest, 3, 209, (Apr. 30, 1890)
- 28) Legislation for the Adirondacks, Garden and Forest, 3, 282, (June 11, 1890)
- 29) Forest Destruction, Garden and Forest, 3, 506-507, (Oct. 15, 1890)
- 30) Adirondack League Club, Garden and Forest, 3, 520, (Oct. 22, 1890)
- 31) The North Woods Thirty-six Years Ago, Garden and Forest, 3, 618, (Dec. 24, 1890)
- 32) Adirondack Mountains, Garden and Forest, 4, 26, (Jan. 21, 1891)
- 33) Adirondack Reservation, Garden and Forest, 4, 49, (Feb. 4, 1891)
- 34) Railroads in the Adirondacks, Garden and Forest, 4, 265-266, (June 10, 1891)
- 35) The Adirondack Park, Garden and Forest, 6, 171, (Apr. 19, 1893)
- 36) The Adirondack Reservation, Garden and Forest, 7, 91, (Mar. 7, 1894)
- 37) Plunder of the Adirondack Reservation, Garden and Forest, 9, 101-102, (Mar. 11, 1896)
- 38) The North Woods, Garden and Forest, 10, 91, (Jan. 20, 1987)
- 39) THOMPSON, Roger C.: The Doctrine of Wilderness, A Study of the Policy and Politics of the Adirondack Preserve-Park, 429-452, Unpublished Ph.D. dissertation, 1962
- 40) THOMPSON, Roger C.: Politics in the Wilderness, New York's Adirondack Forest Preserve, Forest History, 6 (4), 14-23, 1963
- 41) Forestry Building Named for Dr. Fernow, Journal of Forestry, 11 (4), 316-318,
- 42) SCHENCK, Carl Alwin: Birth of Forestry in America, 107-110, the Forest History Society and the Appalachian Consortium, Santa Cruz, Cal. 1974
- 43) PINCHOT, Gifford: Breaking New Ground, 74-78, Island Press, Washington, D.C., 1987 (originally published in 1947)
- 44) RUNTE, *ibid*, 57
- 45) REIGER, John F.: American Sportsmen and the Origins of Conservation, p.91, Univ. of Oklahoma Press, Norman, 1986
- 46) WILLIAMS, Michael: Americans & Their Forests, A Historical Geology, 406-407, Cambridge Univ. Press, 1989
- 47) NASH, Roderick: Wilderness and the American Mind, 116-121, Yale Univ. Press, New Haven, 1982
- 48) KRANZ, Marvin W.: Pioneers in Conservation, 318-368, Ph.D Dissertation, Syracuse Univ., 1961
- 49) ROGERS, Andrew Denny, III: Bernard Eduard Fernow, 277-278, Forest History Society, 1991

Résumé

In late 19th century, the conservation movement has developed almost simultaneously both in Niagara Falls and Adirondack Mountains in the State of New York. However, while scenic conservation was relatively smoothly accepted in the Niagara Falls because of their publicity, va-

rious interests had to be considered for the Adirondack area which consist of patch works of private lands and state owned ones.

For this reason, watershed protection became the main reason of the Adirondack conservation movement. However, another utilitarian activity called scientific forestry was denied in the state forests by the so-called 'forever wild' article of the state constitutions. This inconsistency suggests that the aesthetics, especially of affluent people, was real force behind the forest preservation at that time.